

---

# 青い月の下で：夢幻螺旋

渚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い月の下で・夢幻螺旋

### 【Zコード】

Z6416Z

### 【作者名】

渚

### 【あらすじ】

夏の焼けつくようなある日、「彼」は幻想へと足を踏み入れた

た

少年はかつての思い出を取り戻すために記憶を辿る。  
廃墟で見た幻は形を成して子供へと姿を変えた。

逃げる子供は知らない世界へと少女の手に導かれ、  
真実を追う少年は堅牢たる屋敷の前へ、

運勢は逆転し、彼らを取り囲む風景は夢のように移り変わる。

対極する二つの世界、終わらない螺旋。

この世界は現実なのか？それとも誰かの見た夢なのか？

## 0、？ 陽炎の中（前書き）

この物語は「青い月の下で」という私が「四季廻」というサークルで作っているノベルゲームの外伝です。原作者の私が書きました。しかし、そんなゲーム知らないよ！といつても全く問題ありません。なぜなら、この外伝は本編とはほつとんどつながりが、ない！のです。一応外伝なので本編とつながっていますが、最後の最後まで読まないとわかりません。世界観は同じですが、雰囲気が180度違います。なので青い月体験版をプレイしたことない人でも一つの完結した別の物語として楽しめると思います。そして、外伝読んだから本編も～とプレイしていただくと、あーこんなふうになつたんだと気付いていただける？かも。ノベルゲームに興味がある方はぜひ！

四季廻ブログ <http://ameblo.jp/shikina-g/>

もし感想がありましたら小説家になろうのユーザーさんの感想は下のフォームに、それ以外の読者さんはブログのコメント欄にお願いします。

真っ暗な場所をぼくはずつと走っていた。光りはどこにも見えず、行つても行つても闇しか残らない。そこはまるで明かりのないトンネルのよう。そのうち、ぼくは気付いた。ここは明かりがないんじやない、たぶん何もないんだってことに。周りの何もつかめないし、トンネルのように走る音も反響しない。気を抜けば、飲み込まれてしまいそうな暗闇。あるのは息をきらすぼくの全力疾走。そして、彼女を呼ぶ声。

「お姉ちゃん！」

けれど、返事がない。その代わりに聞こえるのは男の声だ。後ろから前から、一体どこにいるのかわからない声の反響。それは不気味でぼくをいつそう脅えさせる。しかも、その声は一体何を言つているのかぼくにはわからない。帰れ、わかるのはその言葉だけだ。帰れ、帰れ、帰れとひたすらぼくの心を痛みつける。心がきしむ。

『Iの闖入者』

『あの子は帰った。君も行け』

いやだ。痛みをはねのけ、全力でそう応える。こんなところで終わりたくない。彼女に会いたい。絶対に会いに行くんだ！

声に向かつてそう叫ぶ。いや、叫んだはずだった。それなのに、想いは声にならず、かわいた叫び声が頭の中だけでこだまする。

『いい加減に』

それでも聞こえたのか声はいらだち、より強く声が響き渡った。

『もともと君の方から、この世界に迷い込んだんだ』

そんなのぼくは知らない。この世界がどこかなんて知るわけない。ただ、ここはぼくと彼女が一緒に歩いた場所だ。

『なら、知らなくて構わない。力を抜き、眠るように去れ。そして、忘れてくれ』

いやだ。絶対にしないと叫ぶ。ぼくは彼女を探して、また会いに行く！

「つて、あ」

声の反響が止まつたその時、ぎしづりという音が顔の真下から聞こえた。とっさに視線を下に、いやだめだ。首が動かない。だれかに、両手で首をしめ

「いた、い

思考が止まる。苦しい。手をはなせ。息が、できない。

体をそらし、自分の手を前へと伸ばす。かすむ眼の前は真っ暗だ。誰の姿も見えない。けれど、いるはずだ。彼女をさらつたやつが。ゆるさない。でも、その前に手をどける。

もがき続け、手を振りあげる。しめつける相手からはなれようと、  
だけど、届かない。振り乱す。届かない。ついに手は空をつかんで、  
だらりと下がる。動かない。もつ動かない。

「ダメだ。死んでしまう。助けて、お姉ちゃん

？」

「夢か」「

形のない悪夢を見ていた。片手で顔をぬぐい、ゆっくりと息をはく。そうして、あたりを見回すとさつきと全く同じ光景が広がっていた。どうやら一瞬だけ気を抜いたせいで、少しだけ意識が飛んでいたみたいだ。背にしていた木から離れて、再び熱気の中へと戻る。

「ふう……はあ」

それはほつだるほど熱い夏の日だった。コンクリートの路面からは陽炎が立ち昇り、日差しは眩しく、しかし目を背けたくなるほど溢れている。まっすぐ届くはずの光の線は歪んで今見ている視界が現実とも幻とも区別がつかない。

そんな世界に僕は立っていた。歪んだ視界に立っている場所は揺れているよつた気がするのに、そうじやないのは足だけはしつかりと地についているからなんだろう。ここは街のはずれ。住宅街とも駅近くの活気溢れる商店街とも程遠い寂れた場所だ。眼の前に広がっているのは荒野、枯れた雑草の群れ。伸び放題になつた木々の奥に見える小さな廃墟。僕の後ろにはビルがいくつか建っているもののテナント募集の看板しか窓には掲げられていない。ただの廃ビル同然、ここにあるのはそれだけだ。

まるで、何も残っていない。

僕は廃墟の前にまで歩を進めると、ゆっくりとその全体を見た。そんなに大きくはない平屋。壁は風雨にさらされたおかげで黒く汚れ、至るところが剥がれ落ちている。それと反対に扉は壁にはめこまれたように今もまだしっかりと付けられていた。取っ手に手をかけても、びくともしない。もう、ここに棲みついている者もいないだろうに、今もまだこの家を守っている。いや、あるいは、

「このまま腐ってしまったのか」

少し離れて扉を蹴り飛ばす。それを何度も繰り返すと、見かけ倒しな音がして一つに割れた。思ったとおり、歪んだ壁のせいで動かなくなつていただけだった。本当は不法侵入なのを無視して中に入ると、ほこりの臭いが鼻を襲う。張り巡らされた蜘蛛の糸を手で払いのけながら部屋の真ん中へと進むと家具がそのまま残っていた。古いテーブルに椅子。そして、周囲の棚。それ以外に特に目立つた物が見つからないのは何もないのではなく、何年もの間に積み重なつたちりのせいだ。

視界は不十分なくせに、おまけに壁に空いた穴から光が差し込んでいる。きらきら輝いて、なんてミスマッチ。汚さをより鮮明にするだけだ。僕が思う廃墟の雰囲気とも夏の明るさとも全然違うズレ。これなら外にいるのと大して変わらない。この熱さも。歪んだ視界も。どんよりとした空気を払う気もなく、ただその場に立ち尽くす。汗の雫がほこりまみれの床に落ちた。僕の脳裏に早くここを出たいっていう言葉がよぎる。もともと、ここに来たのに別に目的なんない。意味のないただの寄り道だ。ああ、そう、それだけはあの時と全く変わらない。

「入ったことは覚えている。問題はその後だ」

かつてここで何かが起きた。そのことを僕は知っているのに、あの時にあつた記憶がぼんやりとしている。今日ここに来たのはそれを正確に思い出すためだった。けれど、奥に入れば入るほど、「何もなかつたのかもしれない」という思いが増してくる。ただ、僕はこの近くを通りがかつただけで夏の暑さに当てられただけだったと。そうして夜目覚めるまでここで倒れていただけなんだと。そんななんでもない話なのかもしれないという思いは決して嘘じやない。誰かに会つたのは知つているけれど、それが誰なのかさえも僕には曖昧なんだ。その次の日にここに来たけれど、その時からこの家はもぬけの殻だ。

ため息をついて、ゆっくりと眼を閉じる。

ここを出たいといつ心の声を殺して、僕は立つたまま自分自身に問い合わせた。ここに来た理由と今からすること。それをちゃんと言葉にして僕に投げかける。昔会つた誰かがそう僕に教えたように。

まずは自分一人で思い出すことだ。これはきっとある夏の日の思い出、とかそんな内容の話じゃない。今では陽炎のように不確かな幻燈のお話、僕が僕である前のことだ。ただ、一つ覚えておかないといけないのは、僕だけの主觀だと真実と違う点がある。だって、覚えていないからだ。もう一人誰か関係のある人がいないと話にならない。一つ目はその人を探すこと。……一応、どこにいるかはわかつてているはずだけだ。

眼を開けた瞬間にプリズムまき散らす光の中、奥の扉へ誰か子供

が駆けだして行くのを僕は見た、気がした。いや、こんな世界じゃそれが幻か現実なんてわからない。ただその後を追いかけたくなつたのはきっと『氣のせい』じゃないだらう。

汗がまた落ちる。やあ、そろそろ始めよつ。

? 林、そして……

ぼくもまた夢を見ていたよつな気がした。

?

ぼーっとした瞬間、突然視界が真っ暗になつた。

「うわあ！」

あわてて目の前を両手ではじり。すると、何かがぱさりとした音を立てて頭から落ちてきた。よく見ると何枚もの葉っぱがついた折れた枝。偶然落ちてきたみたいだけビ、クモの糸よりは少しマシな気がした。

って、そんなことよつ。

頭を一度大きく振つて眠氣を追いはらひ。そして、すぐにもう一度かけだした。

周囲にあるのは青々とした林。とても高く伸びていて、その枝と葉っぱで空が見えなくなつていて。せつままで明るかったのに、ここではまるでくもつていてるみたいだ。暗くて、なぜかじめじめとした空気。

その時、

「はつー。」

後ろでがさりとした音がして、ぼくは走るのをやめてすぐに振り向いた。けれど、そこにはうつそうとした茂みが広がっているだけで、誰かがいるような気配もない。ぼくを追いかけてきた人もだ。細い木の間にも何にも見えない。

「今度はなんだよ……」

落ちついひとつ胸をおさえ。すぐにまた走ろうと思つたけれど、足が動かなかつた。

そういえば、こんなことは前にもあつた気がする。あの時は確か、そうだ。

そばに落ちていた枝をつかんで、ぼくは後ろへ下がつた。誰かが隠れていてひどい目にあつたトラウマがよみがえる。それならいっそ出てきてくれた方がいい。

だけど、そうすると体がふるえる。だつて、こわいんだ。

何の音もしない茂みにつづくようにして、枝を向ける。慎重に、耳をすませて聞き取つたのは、なんでもない枝と葉っぱが触れ合うかわいた音だった。それ以外に出てきたものはない。ぼくはすぐにそこから離れて、今度はそろそろとあたりを歩いてみる。けれど、人どころか小さな動物さえもいなかつた。

「なんだ……」

一気に力が抜けたような気がして、そばにあつた切り株に座りこんだ。そのまま深いため息。

「いなくてよかつた……」

今までずっと誰かがぼくの後を追いかけていた気がしていた。振り返らなかつたから本当についてきたのかはわからなかつたけど、その人はさつきぼくが会つたような人にも思えて怖くてここまでずっと逃げてきた。何が怖かったかって、彼は何かよくわからない言葉を言つてぼくをおどしてきたから。確か、ぼくのことを……不幸を呼ぶ者、それで、帰れつて言つて。まるで、あいつらみたいにいや、あいつらだったのかな。なぜか走りだした時のこと我が今もまだぼんやりとしている。

「はあ……だめだ、だめ」

もう一度頭を振つて、今までのことを追い払う。とにかく今はもう大丈夫なんだ。後はもう会わないようにして帰るだけなんだから。いつもと同じ。そう、いつもと同じだ。

何度もそう思いこんで枝をわきにおく。そして、ランドセルを降ろして両手で抱えた。その表面にいくつも貼られた二コ二コマークのシール。こうして見ると彼らが僕に向かつて笑いかけてくれるよう感じじる。こうして見るのがぼくのくせで、なぜかほつとする。

「あ、そういうえば……」

ぼくは逃げるのに必死で、どこに行くのか気付きもしなかつた。

周りを見回しても、林だけでその向こうに知つていい街は見えっこない。ぼくの街にはこんな深い林はないから、きっと街の境だ。隣街との間。こんなところまで逃げてきたおぼえはなかつたんだけど。

「まあ、いいか。」そのまま隣街まで行つても夕方まで時間はあるんだし」「

ランセルを背負い直して、歩いてきた方とは逆の方を見る。林は続いているけど、田をこらすと何か向こうにあるのが見えた。行ってみよひ、そう思った時だつた。

バキッと何かが折れる音がした。

「よーう、チビ」

聞きたくもない声がして振り返る。すると、茂みの向こうから3人の男の子たちが歩いてきていた。道に落ちている枝を踏み折つてくるその顔、その声は、

「う……わ」

気のせいじゃなかつた。本当にいた。ぼくと同じ年頃の悪そうな顔をしたアイシガ。

ランセルをすぐに背負い直し、再び枝を手に取る。そんなぼくの様子を彼らは面白そうな眼で見た。にたにたと笑いながら、

「なんで、お前がこんなところいるんだよ。」お前が来るような場所じやねーぞー」

「あ、君たちいるんだ。なんで。学校はー?」

すると彼らは一瞬もふとんとして、顔を見せあつ。だけど、すぐ

に「あははー」と軽い笑い声を出した。

「まさかお前、今日学校あるって思つてたの？ バッカお前！」

「ほんとにいるんだね、」ソラ「うやつ

「なあ、今日が一体何の日だっけー？」

じりじりと近づいてくる彼らを前にぼくははつとした。

そうだ、今日は祝日だ。確か海の日か何かだつた気がする。昨日も一昨日も学校に行かずに時間をつぶしていたせいで何の日だか全然わからなくなっていたんだ。しかも、今日は寝坊して飛び出して……。お母さんも気付いていればよかつたのに！

「で、どうしようか。今日は僕たち、アイツに会つ予定なかつたけど

「んー、でも向こうは枝持つてるし。つてことはやる気つてことだし。おまけに、ソラちは一日くらい何もしてないからストレスたまつてゐしー。とりあえず一緒に遊んでみよ？」

その言葉の後に低く「なぐって」って声が聞こえた。直後に賛成、と勝手に3人が決めて走りだす。

ああ、もうー ついてない！

すぐにその場から飛び出し細い木の間を走り抜け、木の根っこを飛び越える。そのまますぐに別の木と木の間に飛び込んで、右往左往を繰り返す。3人から逃げるため、これがぼくがあみだした逃げ

方だ。

「おひりまかと！」

ヒヨン、と音がして、頭の上を何かが通り過ぎた。当たらない！  
それはぼくの眼の前の木にぶつかり、どこかへとはね返る。

ただ、それに一瞬、田を向けたのが失敗だった。

飛んできたものが石だと確認したその瞬間、足に何かが当たり、  
ふわりと自分の体が浮いた。あ、しまつ　と地面が真上になつた  
瞬間、ひどい痛みと一緒に倒れて転がった。叫ぶ間さえない。

「いて……」

腕をついて起き上ると服は土で汚れて、おまけに膝がすれて血が  
出でている。涙がこじんでぬぐうと手の甲までもが真っ茶色だつた。

「あーあ、つまずいたよ。バカだなあ

「オレらから逃げるから~」

軽い足音に目を向けると彼らがゆっくりと僕の前まで歩いてくる。  
距離は思ったほど離れてなかつた。すぐに枝を取るも、それはもう  
転んだ時に折れて真っ二つになつっていた。

「おひ

反応する間もなく、なぐられる。右のほおが痛い。そして、髪の  
毛をつかむと顔をぼくの目の前まで近づけてくる。

「ほら、早く立てつて。それともマザコンのお前は一人で立っていないんぢゅか、ついて！」

そのにやけた顔に精一杯の力でけりを入れた。血の出た片足で、だ。ぼくだって、そんなすぐにやられるわけにもいかない。吹き飛んだ彼を無視して、もう一度立ち上ると、またすぐに走りだす。けれど、今度は背中に飛び附かれた。

「何しゃがるー！」

振り向いた瞬間、顔を土色にした彼になぐられ、そのまま突き飛ばされた。

再び、地面に転がるぼく。その時、べちゃりといつ音がした。

「……え？」

倒れた先の地面がぬかるんでいる。顔をあげるとそこは泥が混じつた水たまり。なんで、と空を向くとそこに林はなかつた。暗い雲から細かい雨が降りしきつている。

「そんなバカな……」

あいつらが「あーあ、きたねー」なんて言つ声が聞こえる。けれど、それよりも今はさつきまであんなに晴れていた天気が雨に代わっているのかの方がなぜか気になつた。夕立ち？ 正午にもなつていないので？

田を泥のついてない手でこすつて横を見ると、3人がゆつくりと

こっちに向かってきていた。そのうちの一人は顔を真っ黒にして本気で怒っている。後ろの二人はさつきと同じだ。にたにた笑って、きっとぼくと彼のやり取りを見物する気なんだろ。雨が降っていることなんて気にしていない。一方、ぼくは泥から脱出しようとするのに精一杯だ。それに、もう逃げられる気がしない。これもいつもと同じだ。ぼくには彼らに勝つことも、気力さえもわからなくなってしまう。

もうやめよ、できるだけ防御してやつす、あきらめかけたその時、

「ねえ、君。やって楽しくないでしょ?」

全く違う方向から声がした。それから一瞬の間もなく、何かがいじめっ子の頭に当たって彼が泥の中に倒れた。

「楽しくないなら、こっちに来なさい」

はつとして見れば、ぼくから少し離れたところに一人の女の子が立っていた。ぼくよりも大人びた、白いブラウスを着た子。よく見るとその奥には石造りの家があった。その門を開け、こっちに来て片手で仕草している。

さすがにそこまでされてあきらめるぼくじゃない。泥の水たまりからはね起きて、一気に走りだした。彼女の方へ全力で走って、門の中へと飛び込む。後ろから彼の努号が聞こえたけれど、無視だ。彼女は入ったのを確認すると門を閉めるなり、ぼくの手をつかんだ。

「やあ、早く!」

汚れた手なのを気にせず強い力で家中へと引きこんでいく。ぼく自身の体が浮くんじゃないかと思った時、ふつと彼女の横顔が見えた。一瞬だった。それは、こんな時に思うことじゃないなんてわかってる。でも、それはとてもきれいな顔だった。それ以外に表わせる言葉をぼくはまだ知らなかつた。

## ?不思議な少女

?

バタン、ヒドアが閉まつたのと同時にぼくは手を離された。「あ、ちよ、つとなんて言つ暇もなく床に落ちて、また痛みが背中からおそつてくる。

「こひで……」

つづづく今日はついてないと思つたけど、そんなことは後回しだ。ぼくはすぐには姿勢を正して周りを見回す。そこは家の玄関にしてはとても広い場所で、豪華なじゅうたんが広がり、きれいな壁や床が見えた。あれは普通の石じやなくて……ええと大理石つて言つんだつけ？

「どうしたの。ここに来ないの？」

ふんわりとしたやせっこ声。それにはつとして顔を上げるとさつきの女の子がぼくから少し離れたところに立つていた。改めてみると、そのきれいさにまたびっくりする。ぼくより何才違うんだろう、同じ年の女の子よりも少しだけ大人びた顔立ちに肩までかかつたショートヘア。それに白い。服だけじゃなく、そこからのぞく腕と手や顔も人形のように白かった。

「あ、え……ぼく今汚れてるし」

一方のこひちは泥や土でひどく有様だ。すぐそばに大きな鏡があるけど、それを見なくてもよくわかる。

「そ、う……そ、うね。わたしも汚れたまま歩く人を見たことも本で  
読んだことないわ」

彼女は自分自身に言つようにな思議な言葉をつぶやくと「ちよつ  
と待つて」と奥へと消えていった。その軽い足取りを見ながら、  
ぼくははたとさつきの三人組のことを思い出した。そういうえば彼女  
がドアに鍵を閉めたのを見てない。彼らが怒つて入ってくるんじゃ  
ないかと思って、自分のランドセルを前にして抱きしめる。だけど、  
なぜかドアの外からは何も聞こえなかつた。彼らが何か言つ声も暴  
れる音も。

後ろを落ちつかずに見ていると彼女が戻ってきた。

「一応、持つてきたわ。これで拭いて」

振り返つて見ると、差し出されたのは濡れたタオルだつた。これ  
も少女の肌と同じように白い。ぼくはそれをつかむのをためらつた  
けど、彼女がそのままじっとしたままだつたから仕方なく手に取つ  
た。じんわりとした冷たさがてのひらに広がつていく。

「ねえ、ぼく何才?」

「じゅ、十才」

「ふうん。あの子たちとは友達?」

「え? いや、」

一体どうしたらそり見えるんだと思った時、彼女はしゃがんでぼ

くと同じ田線に立つた。その田はあらきりと輝いて、あれ？と思つた瞬間、彼女はぼくのランドセルに手をかけた。そして、いきなり貼つてあるシールをはがし始めた。

「ちよつ……！　何するのー！」

ランドセルを彼女から奪つて取り返すと、大きなシールの一つが半分だけはがれて下が見えてしまつていた。そこにあるのは、

「切り傷……」

きょとんとした表情のまま少女がつぶやくよつと囁いた。

何なんだこの人。人の物にいきなり手を出すなんて、さつきのあいつらと同じじゃないか。それでも彼女は全然、悪びれずに、

「ねえ、見せて。どうしてそんな傷があるの？」

なんて聞いてくる。ぼくは隠そうとしたけれど、なんだか彼女を見ていいつぱいもつこいやと想つてランドセルを田の前に放つた。

「あいつらにやられたのだよ。あいつらだけじゃない、ぼくをいじめてきたやつみんな」

彼らがいたずらしてぼくのランドセルに傷や穴をつけたのをシールでぼくは隠していた。お母さんにだつてばれたことないのに、なんでこの人は見つけてしまうんだわつ。

「不自然だからよ」

聞いてもないのに彼女は言った。

「今までこれにそんなの貼つている小学生なんて見たことないし、貼り方がおかしいわ。とっても不格好」

傷跡をすつとなざる。もうして顔を上げるとぼくを見て、また何も知らないような顔で、

「ビックリした。怒らなーの。ビックリ、やつ返さないの」

「ビックリした……。できたら、最初からやつてるよ」

怒りたい気持ちをおしゃべり、ぼくは言った。そんなこと言われるまでもない。やつたところで何も変わらないし、もつとひどいことになるのがオチだ。先生にも親にも言つても同じ。その時だけよくなつても次の学年になると、また違うやつがぼくをいじめる。

「わたしにはわからない」

「わからないなら、ここのよ」

視線をそらす。この苦しみを知らない人には絶対にわからないんだ。あいつらと同じだ。途端にぎりぎりとした痛みが体にうずき始める。いやだ、いやだ。ためこんでいるものが出できそうだ。大体、この人はいじめなんでものを見たことがないんじゃないか。だから、せつかも友達かなんてことを聞いてきたんだ。

「人に会わない方がずっといい」

思わずやう声に出した。人に会わず、何も知らずに生きていく方

がずっと平和なんだ。

タオルで顔を拭き終わると真っ黒になっていた。

「そう……」

彼女は眼を細めて、軽くため息をついた。その少しだけうつろな表情に、しまった言いすぎたと思ったのもつかのま、

「わたしにはわからない。だけど、一つだけわかることがあるわ」

そう言つて突然立ち上がり、とんとんと足を軽く踏みならす。そして、ぼくを見て「ふふ」と笑みをもらした。挑発的な笑顔に思わずぞきりとする。

「それが何かはまだ教えないけどね。でも、ぼくがそんなに一人がいって言うなら、わたしと一緒に遊びましょう?」

「え?」

一瞬、聞き間違いかと思つた。けれど、彼女は強引にぼくの手をまたつかんで、

「ほらほら」

「え? エ? あ」

すぐにはらいのけよつとしたけれど、その前に体がバランスをくずして倒れてしまった。というか、自分でわかるくらい顔が真っ赤だ。うわああ、はずかしい!

それを彼女は全く気にせずに玄関から床の上へぼくを引きずりだすと、そのままずりずりと連れて行き始めた。

「つて、ぼくは一人がいいんだって！」

「いいから。いいから」

全然よくないし聞いてない。彼女は床が汚れるのも気にせず、ぼくはされるがまま。あやうくランドセルを落としそうになつて、あわてて背負う部分を握りしめる。いろんな意味で必死なのに正反対に彼女は笑つて、

「せつかくの機会だし、まずは庭がいいかしり」

そんな朗らかな声でつぶやいた。お嬢様のような声質なのに行動が全然一致してない。しかも、楽しんでいるのか鼻歌まで歌いだした。一体何でなのかわけがわからない。ぼくはもう何もできずに、ただ、

「変な人」

そう思うのがやつとだつた。

## ?堅牢たる屋敷

?

幻を追い、林を抜けると隣街に出た。林を通りて聞に天気が変わったのかさつきまでの焼けつくよつな日差しが完全になくなり、代わりに靄が広がっている。その靄の中を進んでいると大きな石造りの西洋風の屋敷が眼の前に現れた。その姿はまるでホラー映画に登場するよつな舞台を思わせるほど古く、けれど、決して壊れかけてはいない。むしろ、それはどこにも隙がないほど強固な威圧感があつた。

「さて……一体どうじょうか」

幻はもう見えない。門の隙間から玄関をのぞいても、さつきの子供が通つていつた跡は何も残つていなかつた。ただ、玄関付近の壁の一部が切り取られている部分があることだけが眼にとまる。そこに書かれているのは、

「祁答院」

何て読むのかわからぬけれど、ここが神社じゃない限りこの家の名前だらう。

「それにしても……不気味だな」

改めて屋敷を見ると、ここから見える窓には鉄格子がどれにもつけられていて中が見えない。ホラー屋敷もありだけど、監獄という言い方もふさわしいよつにも思える。

それからしばらく周りを注意深く観察しながら歩いた。屋敷の隣にもちらほら家はあるけれど、さつきの廃屋と同じだ。寂れていて人が住んでいる気配はない。ここも街のはずれだし、どんな街かは知らないけれど、隣なんだし僕の住む街と大して変わらないだろう。

堀沿いに歩いていくと次第に坂になつていく。丘に立てたのだろうか。林の方まで緩やかな坂が続いている。そのままひたすら歩いていくと霧は晴れる気配のないまま、元の正門へと一周してきた。

その途中、

「何だこれ」

打ち倒されたような古い看板が落ちていた。表面には何か字が書いてあるけれど、泥に汚れてしまつてよく読めない。ただ、なんとなく『占い』という文字が読めた。そして、『予言』、『過去視』……？ 最後のって一体何だ。

「……う」

ともかく、なんか見つけてはいけないものを見つけてしまつた気がする。僕は見なかつたことにして、板を元の位置に戻すと再び歩いて戻った。

とりあえず、わかつたことはこの屋敷には余分なスペース、たとえば広大すぎるような庭はどこにもないということ。ただの一区画を占めているだけの家だ。仮に屋敷の地下に隠し通路があつて、どこか別の場所につながつていかない限りは。

ただ、それがなぜか変な感じがする。言葉にすることができるないような、何かが違う違和感。

「おかしいな……」

曖昧だった記憶がまたぼんやりとしていく。あれが本当にあの時の思い出なのかわからなくなってきた。

「とりあえず、庭には行けないな。あつたとしても今の僕にはわからないし。それじゃあ……」

正門の奥、屋敷の扉へと目を向ける。どうするか少しだけ悩んだ後、僕は呼び鈴を探した。人がいるかいないか、いやいなくてもかまわない。ただ、何かがあるはずだ。

門の端に青銅色の小さな鐘を見つけ、それを鳴らさうと手を伸ばす。だけど、その時、

「 っ！」

気配を感じて振り返った。すると、ここから見て一番奥、塀が曲がって見えなくなるその場所に女の子が立っていた。小さい小学生くらいの女の子。彼女は一瞬、ぺろりと舌を出して僕に見せると、すぐに奥へと隠れてしまった。

「待つー！」

すぐに追いかける。なんとかわからぬけれど、そうしないといけない。そんな気がする。塀を曲がり、周囲を見渡すと霧の中へと消えていく少女が見えた。

?

家中を引きずり回され、背中が痛くなってきた時にようやく彼女の手が離された。それと同時にドアがバタンと勢いよく開く音。

「ああ、外に出て。今はほら、もう太陽が輝いているわ」「外……？」

ぼくと同じく引きずられてきたランドセルを背負つて立ちあがると、そこはさつきの玄関と違つて薄暗く狭い場所にドアがあつた。たぶん裏口だね。そして、彼女が言つたように本当に光が明るく差し込んでいた。

「え、でも、」

「大丈夫よ。もうさつきの子たちはないわ」

そう言われて、おそるおそるドアから頭だけ出してみると、そこはこの家の庭みたいなところだった。芝生があつて、いくつもの木が生えていて。だけど、なぜか柵が見えない。他の家も見えず、ずっと向こうまで庭が広がっているように見える。その時、何かがぼく頭に振りかかつた。ぎょっとして上を向くとさらさらと雪が落ちてくる。「え？　え？」と騒ぐそんなぼくの様子が何かおかしかったのか彼女はくすりと笑つた。

「天氣雨よ」

「天氣雨？」

「そつ。本で読んだ」とあるわ。晴れてこるのは雨が降つてくるの」

彼女は雨も気にせず外に出ると片手を広げてみせた。

「でも、すぐ」せむわ。眞にせすうに行きもしう。それとも、また手をつけでいい?」

ぶんぶんと首を横に振る。いくら子供だと言つたつて、もう小学五年生だ。そんな小さな子みたいにされたくないし……そもそも恥ずかしいし。

「じゃあ、早く行こよしょ！」

彼女はそう言つてこきなり向ひへとかけ出した。あわてて、まくも追いかけた。

外に出る、はじまりとしたままかい雨はまるで降り注ぐシャワーのよつだ。それを浴びた草木はきらきらと光つてぼくの田にひつる。空は晴れ渡つていて、空氣もすがすがしい。どこかで鳥の鳴く声が聞こえる。くつの下の草の感触がどこかなつかしい。ずっと昔、幼稚園にいた時にも、こんなふうにして走ったことがある気がする。

「  
」

彼女の笑う声が聞こえた。前を向くと彼女の足はかるやかで踊る  
ようにして野原を回る。白い服装がひるがえって、とてもきれいだ。  
雨が光って、彼女を照らす。

「何が面白いの?」

追いかけながらそう聞くと、彼女は一度振り返つて、

「ううじてこと、そしてここにいる全てよ。ほら、ぼくも感じるでしょう?」

「感じる……?」

確かになつかしくはあるけれど、走りながらあたりを見回すと、ただ自然があふれているだけにしか思えない。

「ふふ、それが全てなの」

彼女は速度を落として、また振り向いた。後ろ向きに歩きながらぼくを見て微笑む。それを見て、ぼくは一瞬くらつとした。

「もう少し行つたらわかるかしら。そうね、ちょっと小高い丘がそこにあるわ。その上から一人で下を眺めてみましょウ」

そして、細い腕を伸ばして先を指さす。そこには、丘のようにもりあがつたところがあった。一本の木が立つていて、両方の枝の上に丸太がいかだのように結ばれた床がある。数分もせずにぼくと彼女はその一番高い所へと辿りついき、木にかかつっていたはしごを登つてみた。それは意外に頑丈でぼくたち二人が乗つても全然ゆれない。

彼女が木の床から足だけ投げ出して座る。その隣をぽんぽんとたいてぼくに顔を上げた。座れってことなんだけど、そうしてみると正直、さつきよりもなぜかどきまぎして落ちつかない。一体どう

してだれい。

「ねえ、ぼくは」れを見てどつ思ひへ。」

「え？」

もじもじとしたまま辺りを見回す。

「風景よ、ここから見える」

「え、えーと。大きな庭だなあ」

少しだけ棒読みになつた。でも、ここからは本当に庭の様子がよくわかる。さつき走つてきた草原や、向こうの林も見えた。さつきは気付かなかつたけれど、ここはすつと緩やかな坂になつていてるようだ。

「本当に自然に囲まれてると思ひ」

「そうね。でも、それだけ？」

それにつなげじうとして……ぼくは首をかしげた。彼女が何を言いたいのか、それが他にあることはわかるのにそれが何かはわからない。

「もう……それはね、世界は美しいってことよ」

「美しい？」

「ぼくにはまだ早かつたかしら」

早かつたわけじゃない。ただ、そんなことせん供のぼくだけ、よく聞く話だつた。世界はきれいだ、かがやいてる……特に命あるものは、なんてことをどこかで聞いた。けれど、

「ぼく」はいつも思えない。世界がかがやいてるのは表面だけだよ

「ヒヒヒ、やつ想ひの？」

「中身は汚い。ぼくが過去にてきた世界はずっとやつだった」

「だから、わからないの？」

「うん。だつて、ぼくは生きてきて楽しくなんかなかつた」

半分だけはがれたかわいそうな「ゴーロシールを見て、シールを上からおさえるよ」ってなぞりながらぼくは言つた。

「こじめられてる今もそつだけど、たとえこじめがなくなつてもあいつらがぼくを見る視線は変わらないんだ。去年だつていろいろあって、先生が手を打つてくれたりしたけど、その時にはこじめはなくなつてもそれだけだつた。だれもぼくに声をかけてくれる子はいなかつた。本当に今までの生活からこじめだけ抜いただけだつたんだよ。あいつらも今でもぼくのことからこだらつて、中身は同じなんだ」

そうして、一息をついて、

「世界は決して美しくないんだ」

冷たい風が吹く。夏なのに暖かくない。少しだけ沈黙が降りた。

「そ、う……じゃあ、ぼくがそう想つのも無理ないわね」

彼女はさびしそうな眼をしてため息をついた。

「ぼくも外側だけはきれいになつたのにね」

「え？」

言われて見ると、さつきまで服や体についていた泥はあとかたもなく消えていた。さつきの雨に濡れて落ちたのかもしれない。不思議だなあと思つたけれど、その時なぜか急に視界がぼんやりとしてあわてて頭を振つた。

「どうしたの？」

「なんでもない」

なぜだらう。ねむくなつたわけじゃないのに。なぜか今見ている風景がありえないものに見えてしまつた。

そんなぼくの様子を気にせず、彼女は話を続けていく。

「わたしには美しいと想える。ずーっと遠くまで

「どこか外国へ旅行したことあるの？」

「ないわ。わたしはあの屋敷から出ないものの

……出ない？ 再び変な感じがしたと思つた時、突然彼女が立ちあがつた。

「じゃあ、次は中よー。」

「うつまつて彼女はまくの肩を呪いた。ぽかんとして見上げると、

「だつて、せつかへりままで来たんだから、この世界が輝いていることを知つてほしーわ」

「え……ええ？ セつかへり、ただ歩いてきただけなんだけど

「わたし元とつては遠出なの」

胸をなつて言われた。ちよつとおどろく。つて、まへせざりままで振り回されたんだら、

「別に……いこねど、一本どひつて。」

すると、彼女は右手をかかげるポーズを Britt、まくに笑いかける

る

「学校。学校に行って諸悪の根源を止む、ここのは」

そんなどとでもなことを見つめた。

## ?少女の疾走

?

少女は止まらない。むしろ声をかければかけるほど、からに速度を増していく。

「ちよつと、びこへー。」

ちよつきと回じ林の中を駆け抜ける。霧は白く、けれど、そこまで深くない。落ち葉を踏む音が一重にこだまし、視界を遮る枝の隙間から水色がはためく。それは女の子の着ているブラウスの色。くせのある髪も揺らして、僕が枝をかきわける間に彼女はどんどん姿を小さくしていく。

「なんてすばしつこいんだ」

僕の足はもう疲れて痛くなっている。今までずっと歩いていたせいで。しかも、この林は屋敷の堀沿いからずっと坂になっているのか、余計に息が上がる。今、女の子が走っている先から歩いてきたはずなのに、ちよつきは気付きもしなかった。

と、その時。突然、音が途切れた。

「おつとと……」

眼の前の女の子が急にふりつとして、そのまま落ち葉の中へと飛び込んだ。木の根っこにでもつまされたのかもしれない。だけど、転ぶ時に彼女はふりつきながら片足で一回転するように僕の方を向

くじ、

「へへ」

そう不思議な笑みを見せてきた。子供らしきれど整った顔立ち  
それが眼を細め、まるで何かを試しているような、そんな表情  
で。

「君は一体……？」

なんだらう、この雰囲気。明らかに変だけど、それ以前にこの感  
覚を僕はどこかで感じた気がする。彼女が何かしているか……じゃ  
なくて、姿、特に顔と服装……。

「あの、どこかで前に、」

「ん？」

彼女はぴょんと、そんな音が聞こえてきそつなくらいの勢いで立  
ち上がると、そばの木を背にして僕と向かい合つた。さすがに走つ  
てきて疲れたのか、ふつと一息ついて口元をぬぐうと、

「49人目」

「え？」

そうなんでもないようだ。僕に言った。まるで、やあ、とか、よお、  
とかそんな感じで挨拶するよう。

その瞬間、

( セー オ い、 )

『 だから林の中を突きぬく声が聞こえた。』

はつとしてあたりを見回す。けれど、どこにも人の姿はない。女の子を見ると、さつきと変わらず普通に立っている。ただ、僕のことを品定めするかのように見つめていることを除いて。

……なんじゅう……きみづ……？

今のは幻聴だつたのか。だけど、女の子が言つたことは聞き間違いには思えない。

「 一体何なのが聞こいつとした時、今度はまた別の声が聞こえた。」  
「 綾奈！ こんなところに来てはいけないと何度も……、」

さつきのとは違い、ずっとはつきりした質感を持った男の声。女の子の奥の方、霧の中から足音を響かせて誰かがやってくる。僕は後ろへ下がつて、すぐに枝をさが

いや、だめだ。思わず動かそうとした手を片手でおさえ、彼を待つ。今の僕は昔のぼくじゃない。

「 綾奈……？」

霧から出でたのは四十代くらいの男性だった。濃いグレーのシャツに、黒いズボンをはいた、ごく普通のおじさんだ。彼は僕を見るなり、はつとした顔になる。そして、なぜか気まずそうな顔をし

て黙り込んだ。

えっと……僕は何か変なことをしたんだろうか？

女の子だけがまた走るようにして、男性の後ろに隠れる。そして、ちらちらと彼の足下からのぞいてきた。その様子からすると何のフローもしてくれそうにない。

気のせいいか、さつきよりも霧が深くなっている。

「あ、あの……僕は別に怪しい人じゃないです。ただの中学生です」

「中学生…………？」

視線だけをじろりと僕に向ける。けれど、威圧感は強くない。

「その女の子を誘拐するとか……そんなことはしないです」

「誘拐、ね……」

それでも男の顔は晴れないものの、何かに気付いたのか少し考える素振りを見せた。

「なら、あの屋敷の住人と関係は？」

「屋敷？　ないです。ぼくは隣の街の住人です」

「隣の街？」

うなずいて詳しく言うと、ようやく彼は僕を怪しい人物じゃないと思ったのか表情を緩めた。

「なら、いいんだ……。娘を引き取りに来た連中じゃないなら、それでいい。変なことを聞いてしまつて悪かつたね」

「いえ……あの、教えてください。あの屋敷は一体何なんですか？」

「それは……」

再び息が詰まるような沈黙。彼は答えてくれそうに再び視線をそらすと、

「ただの森の中の家だよ……住んでいる人は今はいるのかわからぬいが」

「それだけですか？」

「……君は嫌に聞くね。まさか見たのかい？　あれを」

……“あれ”？ 妙な気がしたのを無視し、ゆっくりとうなづいて応える。すると、彼はあとため息をつくと同情するように、

「あの家は古い家柄で、一体いつからそこにあつたのかわからないものだ。おそらく家の造りからして外から入ってきた者たちなんだろうが……。祁答院けいじやくいんという名字もこの国に来た時につけたものだろう。昔は予言の館と言っていた。今もしていたとはしらなかつ

たが、君も見たとおりのものだ。今もいるのかい、あの女の子は？」

女の子……？ それは……誰だ。

「現在のはるか遠くまで見渡し、遠い未来のことまで予言してみせる。どんなことも言い当ててみせる子だよ。会ったんじゃないのか？」

そんな子、僕は知らない。でも、待つて。なんで、この人はそれをそんなに恐ろしい眼をして語るんだ。

「それは……何か悪いことでもあるんですか？」

すると、男はかぶりを振った。

「悪くはないさ。だが、よくもない。私たちの住むような田舎ではむしろ怖いくらいだ。あれは祀つてもいい、崇めてもいい。そのくらいのものだ。それに、」

過去に一体何があつたのか、その男性は僕とまだ眼をあわせずに続ける。

「あれはあるで別の世界に迷い込んだようだ。見るんだよ、ぼんやりとした闇の中で、私が何をしていたのか、そして、何をするのかを」

こんな霧深い場所でさらりとそんなものを見るなんて一重の恐怖じゃないか。そう彼は言った。

その後、一言二言話して僕は彼と別れた。最後の言葉はもう覚えてない。気付いたのは帰る時に女の子が僕を一度振り返ったことくらい

いだ。

「ちうか……」

屋敷へと元来た道を辿りながら、もつ一度考える。

やつぱりこの屋敷には何かがあるんだ。それが僕が昔にあつたことにも関係しているのは間違いない。記憶を思い出す手掛けりはその不思議な力にある。

「……それにしても遠くを見る、と未来を見る、か

占い師が水晶玉をのぞくよじにして、それを見たりするんだろうか。それとも巫女のようによしに神託を授けられるのだろうか。それにしても、その一つの力には共通した要素がある。どちらも“遠い”。未来も同じだ。時間と距離の一つの面でそれらは遠く離れたところにある。

もつ少ししどうなつているのか知りたかったな。見たのは嘘だと言つて。もう遅いけど。

「あれ……、待てよ。過去も遠いけど……」

男性は何をしていたのかとも言つた。それは過去を見る力のはずだ。でも、おかしいな。そんなにいくつも不思議な力があるものなのか？ 水晶玉一つにそんなにいくつも？

でも、これだけ聞いても見ない限り非現実としか思えない。まあ、現実なんて今は置いておくしかないけれど。だって、いこま、

「…………？」

はたと立ち止まる。今なんで僕はそんなことを思つたんだひつ。  
歩いているこの場所は現実のはずなのに。

「現実じゃないわけが……ない」

たとえ異能力が登場しても、それは現実の中でのはずだ。ここまで来たことを朝起きた時から思い出してみるけれど、一度だつて何から外れていはない。

幻を見たとしても、それは幻だ。

と、その時。今度こそ思考が止まつた。

再び坂を下りて塀を曲がつた先、正門の前に誰かがいた。それは白いブラウスを着た女の子。肩までかかる髪、目鼻の整つたきれいな容貌。彼女はぼんやりと僕の方を向くと、ふりつとした足取りでこっちに歩いてきた。その姿は服だけじゃなく手足も同じように白い。

僕は彼女を……知つている？

唐突にそんな思いが思考を突き破る。だけど、おかしい。片方の瞳には光が灯らず、何も見えてないよつに見える。歓迎するような素振りもない。そして、彼女は僕の前に立つた。僕は思わず、つばを飲み込んだ。

その姿はまるで幽霊か何かだ。

そして、彼女はふつと消え入りそうな笑顔を浮かべると言つた。

「よつゝや、か……お の 界へ」

## ?彼女の切れ札

ぼんやりと目を開けると、ぼくはどいかの教室にいた。ぼくの学校じゃない、見たこともない教室。いつの間にか時間が経ったのか教室のカーテンの隙間から夕暮れ色の光が差し込んでいる。黒板の上の時計は午後の3時をさしていた。

「わて、みんな集まつたわね」

彼女は教卓の前で楽しそうにしゃべった。先生のよひこ堂々と胸をはって、席についているぼくとその後ろを見渡す。つられてぼくも振り向くと、一つ列を空けて生徒が座っていた。そこにいたのはつて、え？ ちよつと待つて。

さつあせりへを泥の中に突き落としたあいつらが、なんでここにいるの？

田をこすりてみると状況は変わらない。あいつら3人はなぜか席について、めずらしく行儀よく座っている。普段は絶対にそんなことしないのに。なんだらう、このもやもやとした感じ……違和感？なんかあいつらじやないみたいだ。

つて、そんなことはともかく状況が見えない。何があったか、すぐ思い出そうとするけれど、頭はまだぼんやりしている。あともう、こんな時！

「わて、それじゃあこれから

そもそも、さつもの草原から一休びつやつて、じに来たんだつけ。あの後、木の上から下に降りて、それで……。だめだ、そこから全然思い出せない。まるで、あの場所からまっすぐ飛んできたみたいだ。そんなわけないんだけど。

「いい? ジのゲームで、もしジの子が勝つたら

もしかしてぼくはあの後眠ってしまったんだろうか。それなら、思い出せないのも頭がぼんやりしているのもわかる。夕暮れになつているのも時間の感覚がないからだ。

あれ? でも、さつすると、ぼくはジの女の子に運ばれてきたの? まさか背負われたとか

「もし君たちが勝つたら、ジの子を好きにしていいわ

「へ?」

とんでもなことを考えた時にとんでもないことが聞こえた。はつとして、

「え、え! 一体何? 何を?」

「どうしたの? 顔、赤いけど」

「え、え……いや、さうじゃなくて

思わずつむじて、ふうーっと息をはいた。今はさつてここに来たかは忘れよう。そんなことより、ぼくがこれからとんでもない

「いじになつてしまつ」との方だ！

「好きにするつて何？ ぼく、聞いてないよー。」

「あら、聞いてなかつたの？」

「おいおい、お前何してんだよ」

あいつらの一人から茶々が入つた。突き刺すような言葉が耳に痛く響く。

「ま、お前なんかに勝ち目なんか」

「黙りなさい」

教室に凛とした声が響いた。一瞬にして場が静かになる。彼女が3の方を見てすっと目を細め、

「それはやつてみなければわからないわ。それに、あなたたちが負けたら、もうこれ以上この子をいじめない約束よ。さつき言つたこと、わかつているわよね」

彼女はさらつと笑顔なまま、普段より冷たい声でそんなことを言ったのけた。そして明らかに裏があるような顔でぼくに目配せにしてくる。なんだかよくわからないけれど、ぼくは彼女のその表情を見つめながら思つた。一体何を始めようとしているのだろう。この人は、と。

彼女は3人がだまつたのに満足したのかうなずいて、教壇の中から大きめのケースと何か紙のようなものを取り出した。

「いい? もう一度言つからよく聞いてね。これからあるゲームをするわ」

そう言つて彼女が見せたのは正方形の板みたいなもの。ボードゲームかと思つたら違う。それはマス目のようにへこんでいる。ビンゴの紙を立体にしたものだと思つとわかりやすい。

「今からするのはマスを使つたポーカーよ」

そして、ポーカーって知つてる? と聞いてきたけど、そんなの知らない。ぼくが知つてるのはババ抜きとか大貧民くらいだ。

「本当なら $5 \times 5$ で25マスあるんだけど、みんな初めてみたいだから $3 \times 3$ でやるわ。めずらしいけれど、マスポーカーも本当にあるのよ。ルールは簡単。同じマークと同じ数字、もしくはその両方を二つか三つそろえるの」

そう言つて、彼女はケースを開けて取り出したのは小さなチップ。と思いきや、その表面がトランプになつていて、辺が3センチくらいの正方形の中にマークと数字が書かれているんだ。彼女はその束から何枚か取り出して、ボードにはめてみせる。次にマスに数字が違うスペードのチップとマークはバラバラに同じ数字だけを3列そろえたのをかかげて、ぼくたちに見せた。

「2枚で1ペア、3枚同じだつたらスリーカードといつしてそろえるの。すると、1点、2点入る」

次に1、2、3と数字をつなげるのをストレートで3点、ペアもふくめて同じマークにするとさらに1点加算されると言つた。

「それをこのマスでどれだけ点を増やせるか競うの。縦、横、斜めで重なつてもいいの。わかった？ ちなみに本当はトランプ1セットだけど、数が多い方が面白いと思って特別に枚数を増やしてみたわ。本当はお金をかけたりするみたいなんだけど、今回はお金じゃなくてぼくのこれからをかけてみたわ。だけど、心配しないでお遊びだもの」

「いや、心配しないで……」

心配しかないよ。お金とぼくのこれからって、これからの方がずっと重いじゃないか！ 負けたら終わりだ。それにこいつ勝負」とには、ぼくはとことん運がない。この前、さういふです”ひろくやつたら一か二しか出なかつたんだから。

後ろを振り向けば、あいつらは誰が代表して勝負するか考えながら「ヤーヤーヤ」と笑つてゐる。最悪だ。もう、おしまいだ。

「大丈夫よ、自分を信じなさい」

ぼくが自分でもわかるくらい真つ青な顔をしていたからだらう。ぼくの手にそつと彼女の手が重なつた。そして、耳元に小さな声で、言葉にして飲み込むのよ。ぼくなれりやつとできぬ

そして、彼女はその方法をつぶやくひみつとして言ご、勝負は始まつた。



## ?赤い学校

声を聞いた瞬間、ぶつりと視界が消滅した。まるでテレビの電源を落とすような流れ。反応する間もなく次の瞬間、視界は空に近い場所を映しだした。すぐ真上からゆっくりと迫る茜色の空。靄のような雲が薄く広がる、黄昏といつ名の夕暮れ。

見渡せば、ここは四方をフェンスで囲まれた灰色の床。長方形に伸びた打ちっぱなしのコンクリートは大して広くなく、フェンスを背にしたここから向こうまで10歩の距離もない。それが長く見えるのは、横の辺がそれよりずっと短いからだ。

ただ、そこにある何もかもが夕暮れに赤く染め上げられている。

「屋上……？」

ようやくはつとして、後ろを振り返る。けれど、何もない。そこにあるのは、フェンスの影が建物の端から消えているだけの寂しい光景だ。霧も林も屋敷も、さつきの景色なんてどこにもない。僕は自分一人だけここに飛ばされてきた、そう思えるほど異質で孤立だ。

「なんだ……そりゃ」

手を伸ばせばフェンスの冷たい鉄の感触がする。これに触れると、いつことは視界だけが変になつたわけじゃなさそうだ。なら、飛ばされたのは間違つてない。

僕はある場所からここに運ばれてきたのか。いや、それだと時間と場所はどうなる？ 僕の意識は鮮明について一分前のことを思い出

せる。体の姿勢も何も変わっていない。まさか時間も場所も乗り越えて本当に来てしまつたつていうのか？

「つて、言われてもな……」

きょろきょろともう一度見回してみる。

誰かこの状況を説明してほしい。現実非現実のことを考えてはいたけれど、いきなりすぎる。場面が飛ぶなら最初に言つてほしい。

そう誰かにケチをつけていると、そうだ、あの女の子はどうなつたんだろ？。僕の眼の前に現れたあの子は。さつき聞いた声はノイズ混じりでほとんど何も聞き取れない。といつより人間の声に思えない。あれはテレビの砂嵐の音によく似ていた。

FHONSから外を見てみると、下には広い土色の地面が広がっているだけで女の子どもか誰もいない。つて、「ゴールのネットや白線が引いてあるところを見ると、ここは学校みたいだ。

だけど、僕の記憶にはない。ここに来たことはたぶん一度もない、知らない場所だ。

その時、ふと 声が聞こえた。

気のせいかと思うも、また聞こえる。下の方からだ。耳を澄ますと誰かが話しているようだ。FHONSにしがみついて、できるだけ下を見るとどこかの階の窓の外からカーテンがはためいている。そよそよと静かに風に揺られながら。

「一応行つてみるか……、ここにいても仕方ないし

その前に眼を閉じてみたけれど、開いた先は夕暮れ色で何も変わつていなかつた。

降りる階段を見つけて、ゆっくりと昇降口の白い扉を開く。そして、音を出さないように螺旋の階段を下に降りていった。なぜ、音を出さないのかは僕でもわからない。ただ、そうしないといけないような気がしただけだ。

一つ下の入り口。灰色のドアには非常口と白文字で書かれている。けれど、ここじゃない。声はもつと下から聞こえた。

一つ下の入り口。ドアに向けて耳を澄ます。けれど、何の声もない。

二つ下の入り口。耳を近づけると、今度は声が聞こえた。誰か女の子が話をしている声がさっきよりもずっと近くで聞こえてくる。

ドアノブに手を伸ばす。それを静かにつかみ、ひねると扉が開いた。ゆっくりと開き、眼だけで中を確認する。見えたのは廊下だ。けれど、明かりはつけられていない。右側に並ぶ教室のドアの窓から、夕暮れの光りが射しこんでいる。それだけがここ光源だ。真っ暗の廊下の窓には段ボール紙が貼られ、外から照らされた場所だけが赤い。

けれど、視線を先に向けると二つ目の教室は違つた。光りが大きく廊下に差し込んでいる。わかつた、扉だ。扉が開け放されているんだ。そして、声は、

「今から」

そこから聞こえた。女の子の、今まで聞こえていた声。

「！」の声は……

何を言っているのかまでは聞こえないのに頭に響く。声音だけが、ずっと奥深くにまで届いて、何かを揺らす。これは 何だ。忘れてこる記憶を必死で思い出すような感触。内側からじゃない、外からじりじり開けるような違和感だ。これは、これは 何だ。

「うう、へ……」

震える手でドアを閉める。少し立てた音は気にしない。やかましいのは胸に響く心臓の鼓動。途端に響きだしたそれは次第に内側から僕の体を圧迫する。

ドクン、と。

落ちつけ。

足音を出さずに教室へと進む。一つ目の教室をよぎると声は次第にはつきつと聞こえ出す。教室には他にも誰かいむのか、かぼそい声が他にする。けれど、僕には女の子しか聞き取れない。話を聞こうとした時、その声は、

「どうしたの？」

「はー！」

鼓動が一気に跳ね上がる。

教室からの声が僕を貫いた、気がした、その瞬間。

『ねえ、ぼくは』

砂嵐巻き散る映像が脳裏をよぎった。

遠い記憶、白黒色の景色、下から見上げる彼女の姿

「は、あ」

一瞬だった。一秒もなかつた。ただし、その間に心は満身創痍へと変わつている。

体中をはねまくつた鼓動は、最後に頭痛を起させ一重に僕を切り刻んだ。違和感？ 違う。それはもう違和感なんでものじやない。痛烈な異物感。

胸に手を当て爪を立てる。けれど、止まらない。落ちつけ、なんて言葉は痛みにかき消されて届かない。

ただ、顔をあげる。その姿勢のまま、田指すべき教室を視界にとらえる。

止まらないなら行くだけだ。もつ逃げ道なんて、ない。ここに来た時点で。

「く」

一步」と足を踏み出す度に、頭のそれはいつそうきつくなる。心

臓が鼓動しているのか、頭が割れそうな痛みに悲鳴をあげてこのか、もうわからない。

夕暮れの赤い光が僕を染め上げ、影に落とす。目的の教室はもう眼の前だ。

なのにー　なのに、それでも僕を貫き続けるのは、

声だ。

「 黙りなさい」

いくつもの声が杭となり、僕の記憶野を打ち続ける。

黙れといふなら、その声を黙らせてくれ。その声が僕の歩みを止めさせむ。

彼女に、会えなくなる。

「 今からするのは」

その声が、

「同じマークと同じ数字、もしくはその両方を」一つか二つ

声が、声が、

「ああ、始めてましょー」

心をつぶやく女の声が

あああああああああー、

眼の前が光りに真っ赤になつた瞬間、遂に壊れた音がした。

頭の中、忘れ果てた記憶が突き破られ、赤い視界に走馬灯が走り抜ける。

白黒の景色も砂嵐も全てが押し流された。代わりにそこに現れたのは色鮮やかな光景。

緑の大地、白い少女、手を引かれる誰か、

彼女の笑顔

「は」

「思い、出した……

赤い視界がみるみる遠くなる。すぐそばに彼女がいるはずの教室は遠くなり、僕は暗闇へと投げだされた。

だけど、後悔も何もない。

何もかもが体のうちから抜けしていく中、ただ手にした記憶だけをつかんで僕は眼を閉じた。体は落下の感覚に襲われている。このままずっと僕は落ちていくのだろう。全てが始まる場所へこれから行くんだろう。

ああ、これでようやく僕は 。

彼女に、会える。

?それが全ての始まり

?

戦いは何事もなく進んだ。

結果として、勝負はなんとかなつてしまつた。つまり、勝つてしまつたのだ。

「ありえない……」

ぼくの前にはチップが9つはまつたポーカーのボードがある。スペードやダイヤがいくつもつながり、そのうえ数字も同じに重なっている。一方、相手はペアはいくつか作れているけれど、数字やマークがあわなかつたりして、ちぐはぐな結果になつていた。

「いんなやつに……！」

彼はボードを投げ出し、ぼくをにらみつける。朝見た時よりも激しい視線に思わずのけぞつた。だけど、そこで、

「約束は約束だから」

ポーカーを片付けていた彼女がぼくたちの間に入ると、突然ぼくと相手の手を取つて無理矢理握手させた。しかも、ぶんぶんと腕を振つて、

「いじめない、いじめない。今度から仲良くするのよ」

やつ穏やかな笑顔で言つ。けれど、あいつはそれを振りほどくと「帰るぞ！」と言つと他の一人に言つと、すぐに教室から出て行ってしまった。一人は「へ、え？」なんてポカンとして言つた後、逃げるようにして走つて行つてしまつた。

後にはぼくと彼女だけが残される。彼女はそれを呆然として見送ると、ぼくに振り返つて、どこか申し訳なさそうな顔で、

「やつぱり……変わらないのかな」

そう視線を下に落として言つた。ぼくはそれに「うん……」とかこたえられない。だって、今までずっとそつだつたから。そう簡単に普通に接するなんてできないんだ。でも、

「……ありがとう」

そうほそつと言つたくなるくらいには彼女に感謝していたぼくがいる。

「なんでかわからないけど、ちょっとだけ強くなれる気がする」

「そう……そつか。なら、いいわ。それがわたしが一番思つてほしかつたことだもの」

彼女は田じりをぬぐつと、くすりと微笑んだ。

「それじゃあ、帰りましょうか

「うん…」

その時、ぼくはやつとの女の子のことが少しだけわかつたような気がした。

学校の門を出ると、もうすっかり夜になっていた。せいぜいひとり星が輝く夜空が見える。

「もうそれからお別れのお時間ね」

「もう…まだ一日の半分しか経っていないよ」といつひょんてん

「それはぼくが子供だから。日が暮れるのも早く感じるの」

そう言って、またほほ笑む。けれど、ぼくはまた子供扱いされたのこむすつときた。

「じゃあ、お姉ちゃんはどうだったの？」

「わたし？　わたしは……うん、同じかもしない。わたしは子供じゃないけれど、いつもは外に出ないからあつといつ間だった」

「どうして外に出ないの？」

「体が弱いから。昔は外に出れたんだけどね。わたしは今は部屋のカゴから外を見るだけよ」

「そうなの？」

今も出でるじゅん、そう言つたけれど、彼女は何も言わなかつた。

「ほら、見て。あそこ何があるわ」

指差した先を見ると、きらきらと輝くものがあった。くるくると回転していて、一瞬コーコーか何かと思つたけれど、それはぼくも何度も見たことがあるやつだ。

「メリーゴーランドだ」

「なつかしい。最後に乗つていきましょ」

そして、また彼女は走り出した。今度は一人じゃなく自然にぼくの手をつないで。また引っ張られるぼくは今度はいやとは思わなかつた。

遊園地もない、ただ広い荒れ地の真ん中にメリーゴーランドが光り輝いて回っている。それに誰も乗つている人はいない。誰も見ている人もいない。彼女が近づくとちょっと待つっていたかのように、馬が眼の前で止まつた。

「わあ、ぼくが前に乗るといいわ。わたしはその後ろ」

そう言つて、背が小さいせいで一人で乗れないぼくを両手で持ち上げると馬の首あたりに乗せてくれた。続いて彼女が乗るとすぐにまた動き出す。どこからか聞こえてきた小さなメロディに乗せて、ゆらゆらと馬がゆれる。それはとてもいい。後ろに座る彼女の暖かさがあつたからかもしれない。それはどこか安心できるぬくもり。

「ねえ、ぼくは今日一日わたしと過ごしてどうだった?」

「よかつたよ」

前を見ながら、ぼくはいたえる。ぐるぐると同じ風景が回つてこ  
く。

「世界はどう? 美しごとて思えた?」

「うーん……わかんない」

かねと、やれつゝ途中を弾かれた。

「じうこう時せつのでもいいから美しごとて聞ひの。本に書いて  
あつたんだから」

「えー、知らないよそんなの。あ……でも、」

そこでぼくは馬の頭にせおを寄せるみつにして書つた。

「前より……いいかな。きれいかは今度教えるよ。それまで考え  
てとくから」

「うう。それはよかつた。うれしいわ」

頭をなでられる。ぼくは顔が赤くなつた。

「あ、ううだ。ううこえば、名前聞いてなかつたんだけど、よか  
つたら教えて」

やう言つて振つ向いたとたん、

彼女の姿はなかった。

「え？」

馬がきーしきーとかすれた音をたてる。後ろにはポーカーのボードが一枚、チップと一緒に置いてあるだけだった。他に周りを見ても誰の姿もない。落ちたんじやないかと思つて、下をのぞいても何もない。

「お姉ちゃん？」

呼んでみる。だけど、小さくなつていくメロディ以外には何も聞こえない。そして、しばらくもたたずくにメリーゴーランドは止まつた。音が完全に消え、馬が動かなくなる。ぼくが下に降りた瞬間に、電気が消えた。

真っ暗になつた。

何も見えない。どこを歩けばいいのかもわからない。何の音もしれない。

「お姉ちゃん！」

パニックになつてぼくは無我夢中でかけた。呼びかけながら、けれど、返事がない。何度も何度も呼んでみるけれど、何も返つてこない。

と、その時、またつまずいた。

「いってえ……」

また涙で田がこじむかじ、もつ氣にしてられない。そういうえば、さつきも転んですりむいたんだ。こんなのは、どうかないことない。どうってこと……、

「…………」

足をさわらうとした瞬間、感覚が消えていることに気が付いた。傷がなくなっているんじゃない。ただ、さわれない。そして、そう思うと今度は足が、手が、全ての感覚がなくなっている。うれだと思った瞬間、

『もう君は帰りなさい』

頭に直接響く声がした。どこからか聞こえてきたかわからない。けれど、思わず真上を見上げた。そこにあるのは闇で、何も変わらないけれど氣のせいかなつきよつもよく声が通る。

『あの子も帰った。もうここにはいない。なぜなら、私が連れ戻したんだ。君も行くんだ』

いやだ、と全力で応える。でも、声には出来ず、頭の中だけで叫ぶだけになつた。それでも相手には聞こえたのか腹をたてたみたいだつた。突然、語氣が強くなる。

『いい加減にしたまえ。もともと君の方がこの世界に迷い込んだんだ。力を抜き、眠るように去れ。そして、忘れてくれ。今まであつたことは全部。むろん、娘のことも。だが、娘は覚えているだろう。それだけでいい。な?』

いやだ。絶対にしないと叫ぶ。ぼくは彼女を探して、また会いに行く！

その瞬間、彼女の笑顔が　そしてぼくを連れ回す姿が浮かんだ。消えたはずの手の感触がよみがえる。固く固くその手を握りしめる。

そうだ、ぼくは彼女のことを、

『　あの子はもう走ることありでないこと……』

声の反響が止まったその時、ぎしそうとう音が顔の真下から聞こえた。とつさに視線を下に、いやだめだ。首が動かない。だれかに、両手で首をしめ

「いた、い

思考が止まる。苦しい。手をはなせ。息が、できない。

体をそらし、自分の手を前へと伸ばす。かすむ眼の前は真っ暗だ。誰の姿も見えない。けれど、いるはずだ。彼女をさらつたやつが。ゆるやない。でも、その前に手を貸せる。

もがき続け、手を振りあげる。しめつける相手からはなれようと、だけど、届かない。振り乱す。届かない。ついに手は空をつかんで、だらりと下がる。動かない。もう動かない。

だめだ。死んでしまう。助けて、お姉ちゃん

「帰らないよ」

その瞬間、また別の声が聞こえた。いきなりぼくを苦しめていた空気がほじかれていく。だけど、目が開けられない。ただ、大量の空気が「じゅ、じゅ」とうなりをあげ始めたのが聞こえる。

「ぼくは僕に帰る。もうこれ以上、こんな夢の醒め方はしないよ」

空気の流れがどこか一点に流れていき、そこから白い光がさした。そこに誰かがいる。知らない人だ。だけど、なぜかその声は聞いたことがある。

「そして、忘れることも覚えないなんてことも否定する。誰にもそんなことを決められない。それを決めるのは僕だけだ。断じて、あなたじゃない。まあ、」

そこで、やっと目を開く。それと同時に彼がぼくの方を向いた。知っている顔。だけど、少し違う成長した誰か。彼は少しだけ表情をゆるめると何かを言つた。光と風の奔流の中、見えないはずのくちびるの動きまでもがぼくの中に伝わった。

わかった。ぼくはうなずいた。

まさるよ。

ああ、任せてくれ。

そう言って、彼が手を差し出し、ぼくはそれをつかんだ。一気に流れが加速し、一点に集中する。その瞬間、飲み込まれるような衝

撃に襲われ、ぼくも彼も全てを包みこんだ。

そうして、視界がきれいな光りに満たされ、暖かい色へと変わる。

うつすら眼を開けた後に現れたのは薄暗い小さな部屋。そこは広く豪華なシャンデリアが橙色を灯している。そして、ちよつどその下に位置するテーブルに誰か男が座っていた。

「なんだと……？」

そう言つた相手は40代後半から50代の初老の男。薄い銀色の髪をたくわえ、時代錯誤の貴族を感じさせる。彼は僕を前にして眼を見開き、驚きにのけぞついていた。

「お前は……！　あの時の少年、いや違う。今の少年か！」

「そうだよ。あれから一年後の僕だ」

そして、僕は起き上り、一礼して改めて自己紹介した。

「僕の名前は檍崎渡。まだ中学生になつたばかりだナゾ、あの時の僕とは違う。娘さんに会いに来ましたよ、お父さん」

## ?現実と過去の螺旋

?

「まずはどこから話をすればいいでしょう」

テーブルの椅子を引き、彼と向かい合つようにして座る。相手の男は仰々しい態度を取りながら眉をよせた険しい顔をして僕を見た。それでも、あくまで貴族らしく余裕げに、さつき見せた動搖はどこにも見えない。

「それとも、僕がここに来ることができた理由から話しましょうか?」

「いや、いい」

男は片手で払つような仕草をすると、

「既視感とそれに気付かせるトリガーの存在、それらがあればここに来ることもできる……その可能性を私は忘れていただけだ」

そう自分を守るような発言をすると、ふと視線を移した。それをたどつて見ると、棚の上に何か奇妙なランプがある。彼は立ちあがり、それを厳かな手つきで持ち上げるとテーブルへと置いた。ランプといつても電灯が上向きにつけられていて、下を照らすようなものじゃない。さらに明かりを取り囲むようにして、ぐるりと円柱形に透明なガラスがつけられている。照らされるそれがとてもまぶしい。

「まあ、見たまえ

男はそう言つてガラスの周囲に細長い紙を巻いていく。

その紙は黒く、明かりに照らされるよつてにして、ぼやりと元じむよつにして映り……いや、それは紙じゃない。フィルムだ。いくつものコマが次つぎと浮かび上がつていぐ。

「知つているかね。数世紀前に作られた動画の再生機を。ろづを中心に置き、その周囲に巻いた絵を回転させたものを一点から見つめることで静画が動画になる」

僕はうなずいた。それくらい知つている。それはアニメと同じ、たとえばパラパラ漫画だ。一枚の絵を何枚もつなげていくことで動いているように見える。けれど、そこにかかっているフィルムに見えるのは、

「僕と……」

「娘

男はフィルムを巻き続ける。アンティークの再生機の中には收まらず、重ならないよつに何度も巻いていく。そして、最後には切れたフィルムをだらりと下に垂らした。

「私の特別製なのでね……それに、この話は終わつても最初につながらない」

終わりの絵が最初につながり、永遠と繰り返す　それが美しいものであるのに、と男は言った。

そつと顔を近づけて見ると、一つ一つのコマが光りに照らされてよくわかる。フィルムだから色は白黒でしかないものの、のぞきこめば機械を回してもないのに動きそうだ。

林の中を歩く僕、

屋敷の中を彼女に連れ回される僕、

そして、草原を駆けまわる僕と彼女

「まさか……」

他で遊んでいるようなシーンはない。その三つ それだけなぜか既視感がある。昔ではなく、今さつき見たような感覚。

「その原因は一年前の幻が今、君の中に溶け込んでいるからだ

男が言ったのと後ろへ椅子を引くのは同じだった。

フィルムにはまるで飲み込まれるような錯覚がする。視界の中に全く別の光景が飛び込んでくる。

これが、これが 今まで起きたことの元凶。

「映し出された過去の光景が現実にも現れていたってことか……  
幻なんかじゃなく本当に形を持つて」

視線を上げれば男は僕の様子を見ながら、かすかに笑っていた。  
見下すような視線をして。

「一体あなたは何なんだ……」

「さあな。私は過去の映像をいじるだけの魔術師だとでも言えばいいか」

男が爪を鳴らす。

瞬間、風が吹いたと同時に辺りの光景は一変し、夕暮れ時の何もない荒野へと変わっていた。僕と彼とランプの置かれたテーブルだけが世界に取り残されたかのような風景。

「現実と過去の螺旋へようこそ」

過去視の男は片腕をかかげ、風景を見せるよつとして言った。

「これは現実と過去の一重世界。呪われた血による幻想の産物」

…………そう、か。

僕は両手の拳を固く握りしめ、悟られないよつに深呼吸をした。

それは今まで見たこと、そして、この光景がなければ誰も信じないことだろう。フィルムに触っているうちに生まれた妄想だと誰もが笑い飛ばす。けれど、今までのことに加えて自分の記憶には今、廃墟から走りだした一年前の姿の僕がある。そして、僕が知りえないはずの記憶がある。

少女の言ったこと、したことが。

僕が見た幻の、屋敷に辿りついたその後からの記憶が鮮明に思い

出せる！

「思えば、そこから僕も迷い込んでいたんだな……」

林の中で彼も言った。

『あれはまるで別の世界に迷い込んだようだ。見るんだよ、ぼんやりとした闇の中で、私が何をしていたのか、そして、何をするのかを』

ただし、何をするのかまでは僕は知らない。それはたぶん　僕自身が切り開けばいいんだろう。

「詳しく説明してください、この世界の仕組みを」

男に言つと、彼は待つてていたとばかりに「いいだろ？」と思えた。

「その前に、はじめに言つておくことだが、過去といつても二年前の君と娘が現代に現れたわけではない。これは記録されたものだ。過去に撮つたフィルムの映像を数年後を見る行為とよく似ているといえるだろう」

「僕はそのビデオの鑑賞会に紛れ込んだお客様さんか……」

それを聞いた男がふつと微笑する。けれど、その眼はまるで僕を射抜くようだ。お前は入つていけない世界に入ったのだと彼は思っているのだろう。本当にその通りだ。

「ただ、そのビデオテープはレンズのあるもので撮られたわけで

はなく、ビデオデッキに入れてテレビで見るものでもない。いうならば夢みたいなもの。現実ではないが、それを見ている時はまるで現実のように感じる。一年後の僕は観測者として当時の僕を見ることができただろう」「

そうだ、と僕はうなづく。

たとえすぐ後ろで怪しい物音を立てたとしても一年前の僕は音を聞いただけで眼の前にいた僕を見ることはできない。当たり前だ、相手はただのフィルムなんだから。見ることができたのは消される直前、存在が曖昧になつた時だけだ。

「だが、しかし。一つ、それとは決定的に異なることがある」

「え？」

「確かにこれはフィルムだが、誰が撮つたものなのだろうか？」

「それは……」

記憶に……ない。幻で映し出された時だけじゃなく、本当の一年前には誰も僕たちを映してはいなかつた。

男はすっと眼を細くすると云つた。

「そうだ。故にこれはただフィルムに似せた何かに過ぎない。むろん、私が作りだしたものだが、記録ではない。これはかつてあつたことを、あくまで似せてとつたものの再演だ。役者は同じでもその場のシナリオによつて大きく変わる」

「シナリオ？ そんなものは……」

「ないとと思うかね？ まあ、それでもいいだろ。あつたとしても君と娘が出会いつといつ最低限の条件があるだけだ。裏を返せばそれしかない。ならば、演じる役者の気分、または、」

そこで男は一回口を切り、

「運勢で変わると思わないかね」

一瞬、嫌な感覚が背筋を走った。だけど、すぐに落ちついひとつ呼吸を整える。そうか、僕が不安を感じればいじめっ子が登場し、嫌な気分になれば雨が降つたりするわけか。

「あの幻想は過敏でね。もし娘があらず君の不運は折衷されなければ、あの世界にはやがて隕石でも落ちてきただろう」

男は嫌な笑みを浮かべて、皮肉を口にする。それを僕は受け流すだけにした。

「つまり、僕が見たものと過去のものは違うなんですね」

「全くだ。君の思い出にはならん」

……そつか。僕の思い出は一年前に消されたんだ。再演されたあれは文字通りの幻想なんだ。

「だが、よい導きにはなつた。私の生業故にそのようなものに簡単に左右されてしまつ記録になつてしまつたが、現実には存在しない草原や学校を作り出すことができた。あの場所は空間も場所も時

間もかしいでいる。無限の可能性を紐解くのに君が一役買つた

「いえ、それは場所以外では？」

その時、男の顔が一瞬だけ歪んだ。

「それに、かしいでいるのはあなたの行いじゃなく彼女が原因です。それはわかっているんです」

「……誰から聞いた？」

「聞いてなんていません。僕は過去じゃないところで彼女に会つた。そして、ここに飛ばされたんだ」

「飛ばされた……？」

男が訝しげな顔をして腕を組む。

まさか知らなかつたのか？　さつき、トリガーッて自分で言つていたのに。

いや、でも。

同じように腕を組み、視線をファイルムに移した。

僕だつて、あの時見た彼女を本物だとは思いたくない。何かが違う。そう思つたんだ。

「彼女は一体何者なんですか？」

「それを知る権利が君にあると？」

再び嫌な感覚が背筋を駆け抜けた。けれど、ここで負けるわけにはいかない。彼女に会って聞くのは……いや、だめだ。彼女から聞けば何かが壊れてしまう気がする。本当のことを知るのはここしかない。覚悟を決めて僕はうなずいた。

「ふ……君は客人と言つたが、誰も君を招待してはいない。ただの不法侵入者だ。だが、まあいいだろう。君に娘の真実を教えてあげよう」

彼は言葉を切り、光のない眼で僕を見据えると、

「あれは二重存在そのものだ」

そう、ゆっくりと、低い声で告げた。

「ま、それだけ聞いてもわからないだろうな。私がこのようなことを話すのも変な話ではあるが……要するに二つの能力が重なっている」

そして、彼女は二重存在であつて二重人格ではないと前置きして言った。

「私たちの血は特殊でね、必ず一つ異能を持つた人間を生み出す。私の場合はこのように過去を映しだすことだけだが、娘は全く違つた。あれは右眼が未来視、左眼が遠見の能力を持っている。この家系で一種類の異能はイレギュラーだといえよう。私でさえどういう

メカニズムになつてゐるかそれまで気付かなかつたのだ。異界に巻き込まれたのはその一方だけで片方が現実世界で健在だつたということは、存在としての魂を分割することができるのだよ、いや、分割というよりも重なつていたという方がいいか。わかるかね？つまり、それに宿つた能力以外全く同じ魂が全く同じ心の動きをしているのだ

「……わからない」

「難しく考へるべきではない。眼を魂と置き換える。二つある眼の一つが別世界に飛んだということだ」

「……なるほど」

とりあえず、生靈みたいなものだと思つことにした。それに今説明で別にわかつたことがある。一年前の僕が見た彼女とさつき見た彼女、どちらも片方の眼が見えていないような気がしたのは分割されたせいで半分だけしか視界が見えてなかつたからだ。

あれ？でも、待つて。何か重大なことを僕は見落としている。

「だが、それでも本来の体は一つだ」

それに気付いているのか気付いてないのか男の話は続く。

「あれば元から体が弱い上にそのような異常な能力は体を圧迫する。いくら精神がよくても、だ。視力を失うのも無理はない」

「な？」

じゃあ、やつきの彼女は……？ まさか、そんな。

男は自嘲氣味に笑い、テーブルの上に置いてあるランプに手を置いた。

「私はあの時の娘の姿を見るために、これを動かしているんだ。今はもう見られないからね。慰みと笑うかい、君は？」

（そんなバカな。嘘だ、嘘だ。何かが違う。何か僕は違う方向へ話を持つてかれている）。

心の奥深くから声が聞こえる。それが何か直感的なものじゃないことに気付くも何が何だかわからない。彼はそんな僕を見ながら下から垂れ下がったフィルムの切れ端をさすりながら言った。

「で？ 君は真実を知つて何をするつもりだ？」

「何をするつて……」

そんなことわかりきつていてる。この幻想 자체をなくすことだ。こんなのがあつてはたまらないと僕は初めて自分自身の姿を見た時から思つていた。だけど、僕が幻想を止めることは彼の幸せを壊してしまつうことになる。それは……できない。

（違う！ やつじやないんだ！ 男の言葉に耳を傾けるな！）

それに田舎はもつ一つあつたはずだ。

「僕は彼女に会いに……」

「おや？ 会つたから！」と叫つたのではなかつたか？」

男のにやにやとした笑いが記憶にある何かにつながる。明らかに別物なくせに、なんだこれは。一体何なんだ。いや、違う。今はそんなことに気を取られている場合じやない。だけど、彼女？ 男の言つように彼女ならさつき会つた。なら、もつ目的は果たしたはずだ。幻想を止めるんじやないなら、これで帰つてもいい。でも、それでいいのか？ 何か間違えていいか？ 何か忘れていいか？

（そうだ！ 思い出せ！ 失敗を繰り返すな！）

「僕が会つた彼女は……」

『よつこや、か……お の 界へ』

その姿はやつれ、肩までかかる髪はつやをなくした少女。

僕の眼の前に立つたのは、まるで幽霊のよつな

彼女じや、ない？ 最初に見た時の違和感が再び胸をうずく。心臓の鼓動が再び起き上る。でも、あれは彼女。どこから見ても彼女。記憶にある姿は……記憶にない。記憶にあるのはそうだ、幻想だ。僕は一年前にも本当の彼女を見たわけじやない。僕が見たのはあの子しかない。なら、どこにも変なところはない？

だけど、なぜこんなにも寒気が走るんだ。なぜこんなにも否定する声が内側から響くんだ。

「確かに、これから何もせずに帰るのもよくなはないか」

男は垂れ下がったフィルムを持ち上げ、ガラスの外側からそれを中へと入れた。

まるで、話は終わった、そう言わんばかりの雰囲気だ。

「だが、あいにくここには手土産になる物はなくてね。あるのはトランプしかないが……君とはもう会うこともないだろうからゲームをしよう。ポーカーにしようか」

男は思いついたように手を叩くとどこから取り出したテーブルの上にボードを置いた。チップを使うポーカーだ。それは25マス。

「君は9マスしかやつたことがないんじゃないかな？ ルールはペアが増えるだけで同じだ」

僕が何も言う間もなく箱に入ったチップが渡され、始まりの合図もなく男はマスに入れていく。僕のターン。引いたのは大した数字じゃないけれど、何が出てもこのゲームではバスはできない。入れる、埋める、入れる、マスが埋まっていく。

「ああ、そうだ。どうせやるのだから、賭けをしよう」

パチパチと入れていく音が響く間に男が言った。

「とはいっても、子供の君に金を払わせるわけにもいかない。そうだ、もう一度ちゃんと娘に会つのはどうだ。私に勝てれば会える、勝てなければ会えない」

「「」の家の外にいるんだじゃ……」

「「」の家?」

また男が眼を細める。そして、にやりとした笑みが漏れた。

「どうだらうな。もう帰ったかもしれないし、娘が「」にいるかは君が知ることではない。なぜなら、幼い時ならばにぞ知らず、今の君を娘に会わせると私に言つのはずいぶんと肝の据わつたことではないかね?」

「…………」

「」の男にはビリヤリ何もかもお見通しのようだ。

「どこで「」とは勝てなかつたら会えない、のか……」

それはやだな。そう思つてしまつた。その瞬間、どこからか聞こえていた声が消えた。

25マスに猛烈な勢いで入れていく。なぜか考える暇がない。いや、むしろ考えられない。いくつもの思考が絡み合ひ、これ以上の結論が出てこない。出来あがつた答えには靄を感じる。まるで、これはあの時のこと。あの時の勝負もこうだつた。彼女が言つてくれたアドバイスはとにかく入れていけばいい、なんてものでとてもアドバイスになつてなかつたけれど、確かにそうだつた。あの時出たチップはどれもこれもいいもので簡単につなげていって、あれが出たらこれが出来るみたいな……

ああ、あの勝負はまるで夢のよつ。現実味のない幻想の世界。似てこる、あの時と。そうだ。だとしたら、はたして僕がいるこの世

界も現実なのか？

「ゲームオーバー」

男の声が耳に響いた瞬間、我に帰つた。途中からボードを見ずに打ち込んでいたようだ。見れば、ぼくのマスはひどい結果で、男のは英語で書かれた数字がマスに並んでいる。あれは確かロイヤルストレートフラッシュ……つて、あれ……僕は負けた……？

とたん、ブチリと切られる音がして視界は真っ暗になった。

「あ……？」

ゲームのリセットボタンとまるで変わらない、あつけない幕切れ。手足の感覚が消え、どこかで味わった苦しみが僕を消し去っていく。何も残らない痛み、何も記憶されない無情なデリートキー。ただ、ふと残った思考をめぐらすと、なぜか消される痛みだけ幾十と感じた、ような、気が……。

?現実と過去の螺旋（後書き）

次回、最終回です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6416z/>

---

青い月の下で：夢幻螺旋

2011年12月31日20時50分発行